

# 適用表と使用上の注意【最新版】

## フルメット液剤

2016年12月14日改訂

協和発酵バイオ株式会社

最新の適用表 : 2016年12月14日改訂

適用表【フルメット液剤】

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ホルクロルフェニロンを含む農薬の総使用回数
ぶどう (2倍体米国系品種) [無核栽培]	着粒安定	ホルクロルフェニロン 2~5ppm	満開予定日約14日前	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	ジベレリンに加用 花房浸漬 (ジベレリン第2回目処理は慣行)	2回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内
	果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 5~10ppm	満開約10日後		ジベレリンに加用 果房浸漬 (ジベレリン第1回目処理は慣行)	
ホルクロルフェニロン 3~5ppm		ジベレリンに加用 果房散布 (ジベレリン第1回目処理は慣行)				
ぶどう (テラウエア) [無核栽培] (露地栽培)	ジベレリン処理 適期幅拡大	ホルクロルフェニロン 1~5ppm	満開予定日18~14日前		ジベレリンに加用 花房浸漬 (ジベレリン第2回目処理は慣行)	
	着粒安定	ホルクロルフェニロン 2~5ppm	開花始め~満開時		花房浸漬	
		ホルクロルフェニロン 5ppm			花房散布	
	ぶどう (テラウエア) [無核栽培] (施設栽培)	果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 3~5ppm		満開約10日後	
ホルクロルフェニロン 3~10ppm		ジベレリンに加用 果房散布 (ジベレリン第1回目処理は慣行)				
ジベレリン処理 適期幅拡大	ホルクロルフェニロン 1~5ppm	満開予定日18~14日前	ジベレリンに加用 花房浸漬 (ジベレリン第2回目処理は慣行)			
ぶどう (2倍体 欧州系品種) [無核栽培]	着粒安定	ホルクロルフェニロン 2~5ppm	開花始め~満開前 又は 満開時~満開3日後		開花始め~満開前に使用する場合 花房浸漬 (ジベレリン第1回目及び 第2回目処理は慣行)	
		ホルクロルフェニロン 5~10ppm	満開10~15日後	満開時~満開3日後に使用する場合 ジベレリンに加用 花房浸漬 (ジベレリン第2回目処理は慣行)		
	無種子化 果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 10ppm	満開3~5日後 (落花期)	ジベレリンに加用 果房浸漬 (ジベレリン第1回目処理は慣行)		
	花穂発育促進	ホルクロルフェニロン 1~2ppm	展葉6~8枚時	ジベレリンに加用 花房浸漬		
	ぶどう (3倍体品種) [無核栽培]	着粒安定	ホルクロルフェニロン 2~5ppm	開花始め~満開前 又は 満開時~満開3日後	開花始め~満開前に使用する場合 花房浸漬 (ジベレリン第1回目及び 第2回目処理は慣行)	
					満開時~満開3日後に使用する場合 ジベレリンに加用 花房浸漬 (ジベレリン第2回目処理は慣行)	
	果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 5~10ppm	満開10~15日後	ジベレリンに加用 果房浸漬 (ジベレリン第1回目処理は慣行)		

適用表【フルメット液剤】：続き

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ホルクロルフェニロンを含む農薬の総使用回数		
ぶどう (サニールシュを 除く巨峰系 4倍体品種) [無核栽培]	着粒安定	ホルクロルフェニロン 2～5ppm	開花始め～満開前 又は 満開時～満開3日後	1回、 但し降雨等 により再処 理を行う場 合は合計 2回以内	開花始め～満開前に使用する場合 花房浸漬 (ジベレリン第1回目及び 第2回目処理は慣行)	3回以内、 但し降雨等 により再処 理を行 う場合は 合計5回以内		
	果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 5～10ppm	満開 10～15 日後		満開時～満開3日後に使用する場合 ジベレリンに加用 花房浸漬 (ジベレリン第2回目処理は慣行)			
	無種子化 果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 10ppm	満開 3～5 日後 (落花期)		ジベレリンに加用するか 又は ホルクロルフェニロン単用で処理 果房浸漬 (満開時～満開3日後のジベレリン による無種子化処理は慣行)			
	花穂発育促進	ホルクロルフェニロン 1～2ppm	展葉 6～8 枚時		ジベレリンに加用 花房浸漬			
ぶどう (サニールシュ) [無核栽培]	着粒安定	ホルクロルフェニロン 2～5ppm	開花始め～満開前 又は 満開時～満開3日後		開花始め～満開前に使用する場合 花房浸漬 (ジベレリン第1回目及び 第2回目処理は慣行)		1回、但し降雨等 により再処 理を行う場 合は合計 2回以内	3回以内、 但し降雨等 により再処 理を行 う場合は 合計5回以内
	果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 5～10ppm	満開 10～15 日後		満開時～満開3日後に使用する場合 ジベレリンに加用 花房浸漬 (ジベレリン第2回目処理は慣行)			
	無種子化 果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 10ppm	満開 3～5 日後 (落花期)		ジベレリンに加用するか 又は ホルクロルフェニロン単用で処理 果房浸漬 (満開時～満開3日後のジベレリン による無種子化処理は慣行)			
	着粒密度低減 果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 3ppm	満開予定日 14～20 日前		ジベレリンに加用 花房浸漬 (ジベレリン第2回目処理は慣行)			
	花穂発育促進	ホルクロルフェニロン 1～2ppm	展葉 6～8 枚時		花房散布			
ぶどう (2倍体米国系 品種) [有核栽培]	果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 5～10ppm	満開 15～20 日後		果房浸漬		1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	
ぶどう (マスカット・オブ・ アレキサンドリアを 除く2倍体 欧州系品種) [有核栽培]	花穂発育促進	ホルクロルフェニロン 1～2ppm	展葉 6～8 枚時		花房散布		2回以内、 但し降雨等 により再処 理を行 う場合は 合計4回以内	
ぶどう (巨峰系 4倍体品種) [有核栽培]	果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 5～10ppm	満開 15～20 日後		果房浸漬		1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内	
ぶどう (マスカット・オブ・ アレキサンドリア) [有核栽培]	着粒安定	ホルクロルフェニロン 2～5ppm	満開期	花房浸漬	3回以内、 但し降雨等 により再処 理を行 う場合は 合計5回以内			
	花穂発育促進	ホルクロルフェニロン 1～2ppm	展葉 6～8 枚時	花房散布				
ぶどう (あづましずく)	果粒肥大促進	ホルクロルフェニロン 5ppm	満開約 4～13 日後	ジベレリンに加用 果房浸漬 (ジベレリン第1回目処理は慣行)	1回、但し 降雨等により 再処理を行う 場合は合計 2回以内			
ぶどう(高尾)		ホルクロルフェニロン 5～10ppm	満開時～満開7日後	ジベレリンに加用 花房又は果房浸漬				

適用表【フルメット液剤】：続き

作物名	使用目的	使用濃度	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ホルクロルフェニロンを含む農薬の総使用回数
イチゴフルーツ	果実肥大促進	ホルクロルフェニロン 1～5ppm	開花後 20～30 日	1 回	果実浸漬又は果実散布	1 回
なし (幸水)		ホルクロルフェニロン 10～15ppm	満開 10～20 日後		果実散布	
西洋なし (ラ・フランス)		ホルクロルフェニロン 10～30ppm	満開 15～20 日後		果そう散布	
なし (豊水)	みつ症軽減	ホルクロルフェニロン 2ppm	満開期			
びわ (3 倍体)	着果安定 果実肥大促進	ホルクロルフェニロン 第 1 回目 20ppm 第 2 回目 20ppm	満開予定日約 7 日前～満開時 (第 1 回目)及び 第 1 回目処理後 35～60 日(第 2 回目)	2 回	ジ・ペ・レリン200ppm 液に加用 第 1 回目：花房浸漬、 第 2 回目：果房浸漬	2 回
メロン (アムスメロン)	着果促進	ホルクロルフェニロン 5～20ppm	開花当日	1 回	果梗部塗布	1 回
		ホルクロルフェニロン 1～2ppm			子房部散布	
メロン (コサックメロン)		ホルクロルフェニロン 200～500ppm	開花前日 又は 開花当日		果梗部塗布	
メロン (ブ・リンスメロン)		ホルクロルフェニロン 10～50ppm			子房部散布	
メロン (キング・マルチー メロン)		ホルクロルフェニロン 250ppm			果梗部塗布	
		ホルクロルフェニロン 50～100ppm			子房部散布	
すいか		ホルクロルフェニロン 100～500ppm	開花当日		果梗部塗布	
		ホルクロルフェニロン 10～20ppm			子房部散布 (0.3～0.5mL/子房)	
かぼちゃ	ホルクロルフェニロン 500ppm	開花当日	果梗部塗布			
	ホルクロルフェニロン 10～20ppm		子房部散布 (0.3～0.5mL/子房)			
トマト	放射状裂果 軽減	ホルクロルフェニロン 5～20ppm	幼果期	1 果房当り 1 回	幼果に散布	1 果房当り 1 回
チェーリップ (促成栽培)	花丈伸長促進 及び 茎の肥大促進	ホルクロルフェニロン 0.05～0.1ppm	草丈 7～10cm 時	1 回	ジ・ペ・レリン100ppm 液に加用 葉筒内滴下処理	1 回

「フルメット液剤」：2016年12月14日改訂

## 使用上の注意事項

1. 本剤（ホルクロルフエニユロン液剤、0.10%）は下記の表にしたがって水で希釈すれば所定濃度の薬液を調製することができる。

フルメット液剤〔ホルクロルフエニユロン0.10%〕10mL当りの薬液調製量

ホルクロルフエニユロン濃度 (ppm)	1	2	3	5	10	15	20	30	50	100	200	250	500
薬液調製量 (水)	L 10	L 5	L 3.3	L 2	L 1	mL 667	mL 500	mL 333	mL 200	mL 100	mL 50	mL 40	mL 20
希釈倍率	1000	500	333	200	100	67	50	33	20	10	5	4	2

2. ジベレリン以外の薬剤との混用はさけること。なお、ジベレリンと混用する場合は、ジベレリンの使用上の注意事項に留意し、ジベレリン溶液に、本剤が所定濃度になるように添加し、よくかくはんしてから使用すること。
3. 調製した薬液は効果の低下のおそれがあるので、調製当日に使いきること。
4. 処理後の降雨は効果を減ずるので、降雨が予想される場合は処理しないこと。また、異常な高低温、多雨、乾燥等異常気象の続くときは使用しないこと。
5. 対象作物に対する注意事項

### (1)ぶどう

①ぶどうに関する作物名中の区分は、ホルクロルフエニユロンに対するぶどうの反応性の違いを考慮した区分なので、ぶどうの品種がどの区分（品種群）に該当するか、病虫害防除所等関係機関に確認してから使用すること。

②下記③の「ぶどうの品種による区分」に記載のない品種に対して本剤を初めて使用する場合は、病虫害防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用すること。

### ③ぶどうの品種による区分

#### イ. 2倍体米国系品種

「マスカット・ベリーA」「アーリースチューベン（バッファロー）」「旅路（紅塩谷）」

#### ロ. 2倍体欧州系品種

「ロザリオ ビアンコ」「ロザキ」「瀬戸ジャイアンツ」「マリオ」「アリサ」「イタリア」「紫苑」「ルーベルマスカット」「ロザリオ ロッソ」「シャインマスカット」

#### ハ. 3倍体品種

「サマーブラック」「美嶺」「ナガノパープル」「キングデラ」「ハニーシードレス」

#### ニ. 巨峰系4倍体品種

「巨峰」「ピオーネ」「安芸クイーン」「翠峰」「サニールージュ」「藤稔」「高妻」「白峰」「ゴルビー」「多摩ゆたか」「紫玉」「黒王」「紅義」「シナノスマイル」「ハイベリー」「オーロラブラック」

（「あづましずく」等の巨峰系4倍体シードレス品種は該当しない）

④本剤の使用により、着粒過多による裂果、着色遅延、果粉の付着不良、糖度低下や果梗の硬化による脱粒等果実品質に悪い影響を及ぼすおそれがあるので、使用に当たっては開花前の整房、着粒後の摘粒及び結果量調整等の栽培管理を適切に行うこと。栽培管理については、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

⑤使用時期や使用濃度を誤ると、有核果混入や果面障害（果点のコルク化）、着色遅延及び果色変調等のおそれがあるので、使用時期、使用濃度は厳守すること。

⑥降雨や、異常乾燥（フェーン現象等による異常乾燥）の心配の無い日を選んで処理すること。

⑦処理後の天候急変（降雨、異常乾燥）で本剤の吸収が不十分になるおそれがある場合には、ホルクロルフエニユロンを含む農薬の総使用回数の範囲内で再処理を行うことができる。なお、再処理に当たっては、病虫害防除所等関係機関の指導を受けること。

⑧樹勢が健全か、強い方が安定した効果が得られるので、樹勢は強めに維持する。樹勢の弱い樹では効果が不十分なので使用を避けること。

(2) キウイフルーツ

①処理時期が早い場合には、変形果の発生、生理落果の増加、過剰肥大に伴う糖度低下を生じるおそれがあるので注意すること。なお、使用に当たっては、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

②着果過多は、樹勢に影響を及ぼすおそれがあるので、樹勢に応じた適正着果量をこころがけること。

③薬液が均一に付着するよう、ていねいに処理すること。果頂部に薬液がたまり、その部分が過剰反応すると変形果発生につながるので、処理後、棚の針金等をゆすり、過量の薬液を振り落とすこと。

(3) なし（幸水）、西洋なし（ラ・フランス）

①薬液が果実表面に十分付着するようていねいに散布すること。

②使用時期が早いほど、使用濃度が高いほど果実肥大促進効果は大きいですが、反面、果形の変形や熟期の遅れ等に及ぼす影響も大きくなるので、使用時期、使用濃度に十分注意し、また、人工授粉の徹底、適正着果量、日照不良を解消する整枝等適切な栽培管理を行い、健全な樹勢の維持に努めること。

(4) なし（豊水）

①本剤は人工授粉後処理すること。

②薬液は果そう全体に付着するよう果そうから滴り落ちる程度たっぷり散布すること。

③使用濃度が高すぎる場合は、果形が縦長になるおそれがあるので、使用濃度は守ること。

(5) びわ（3倍体）

①本剤処理しないとすべて落果するので必ず処理すること。

②樹勢が弱いと果実肥大等の効果が出にくい場合があるので、樹勢は強めに維持すること。2回目処理時に1果そうに数果残しておき、果形の良否が判断できる時期に品質の良い果実を残して摘果し、適正着果量をこころがけること。

③第1回目の使用時期が早すぎると果梗部のネックが発生しやすく、第2回目の使用時期が遅すぎたり、使用濃度が高い場合は果面の緑斑が残りやすい傾向があるので、使用時期、使用濃度を守ること。

(6) メロン（アムス、コサック、プリンス、キングメルティー）

①本剤の使用により、奇形果、糖度の低下、ネットの発現不良、果梗部の異常肥大等薬害発現のおそれがあるので注意すること。

②本剤の果梗部塗布の場合、塗布量が多いと薬害を生じるので、つけすぎないように注意すること。果梗部塗布の場合は極細の綿棒を用い、1果あたり2点（果梗の両側）処理で10～20果/1回処理する。

③本剤の使用による糖度の低下等品質低下を防止するため、人工授粉との併用を行うことが望ましい（アムスメロン、キングメルティーメロンでは、必ず人工授粉を行うこと）。

④子房部散布の場合は、子房部の両側からていねいに散布すること。この場合、薬液が花（柱頭）にかかると受粉障害をおこすので、花にかからないよう注意すること。

(7) すいか

①授粉時、低温や日照不足で着果しにくい時はやや高濃度で処理する等、着果条件を勘案し、使用濃度を加減すること。

②果梗部への塗布量は極微量とし、果梗部の両側に処理すること。塗布量が多すぎると、果梗部の異常肥大や果梗部に近い果実基部付近の果皮の肥大あるいは果面色が濃緑色のまま収穫まで残る他、黄帯部分の増加等薬害発現のおそれがあるので注意すること。果梗部塗布の方法はメロンの場合と同様に行うこと。

③本剤の使用による糖度の低下等品質低下を防止するため、人工授粉と併用すること。

④子房部散布の場合は、子房部の両側からていねいに散布すること。この場合、薬液が花（柱頭）にかかると受粉障害をおこすので、花にかからないよう注意すること。

(8) かぼちゃ

①果梗部への塗布量は極微量とし、果梗部の両側に処理すること。塗布量が多すぎると、果梗部が異常肥大するので注意すること。果梗部塗布の方法はメロンの場合と同様に行うこと。

- ②本剤の使用による糖度の低下等品質低下を防止するため、人工授粉と併用すること。
- ③子房部散布の場合は、子房部の両側からていねいに散布すること。この場合、薬液が花（柱頭）にかかると受粉障害をおこすので、花にかからないよう注意すること。

(9) トマト

- ①果房第1果の幼果の果実径が3～4cm大を目安に処理すること。
- ②白斑症状が見られる場合があるので高温時の処理はさけること。果頂部に薬液がたまると、同様の症状が見られる場合があるので、処理後、過量の薬液を振り落とすこと。なお、薬液を振り落とす際は、他の果房にかからないよう注意すること。

(10) チューリップ

- ①本適用は促成栽培を対象とし、花丈伸長及び茎の肥大を促し「切花」の品質向上を目的とする。
- ②微量で鋭敏に作用し、過量の場合、花卉の奇形や肥厚の生育異常、葉や花の着色不良若しくは色抜けの生理障害等の薬害が発生しやすいので、使用時期、使用濃度及び使用方法を厳守し、滴下処理に際しては、液が葉筒内より漏出しないよう注意すること。薬害回避には草丈7～8 cmとやや早い時期の低濃度処理をこころがけること。
- ③本適用の効果には品種間差異があるので、促成栽培品種であっても事前に最寄りの指導機関等の指導を受け、効果及び薬害の有無を確認してから使用濃度等を決めること。

6. 本剤の使用に当たっては、使用濃度、使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意すること。適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤をはじめて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効薬害の有無を十分確認してから使用すること。なお、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。